

聖書：マタイ 21：23～32

説教題：思い直して信じる

日時：2020年3月1日（朝拝）

今日の箇所では祭司長と民の長老たちがイエス様のところへやって来ます。彼らはエルサレムの宮を管理していた人たちでした。誰も彼らを見下して宮で活動することはありません。ところがイエス様は、彼らの目から見れば、突然宮に来てやりたい放題のことをしています。人々から熱狂的な賛美を受けて都に入ってきたと思ったら、宮の中で自分たちが許可している商売人たちの追いつきまでしました。また様々な病気にかかった人々を癒やして、子どもたちから賛美され、それをやめさせない。この日も宮で人々を教え、人々を引き付けています。これ以上、彼をのさばらせておくわけにはいかない、彼を撃退しなくては！と近づいて来たのが今日の箇所です。前回、葉があるだけで実がないいちじくが枯れる奇跡が行われましたが、まさに当時のエルサレムがそのような状態にあったことが益々明らかにされていきます。

彼らはイエス様のもとに来て、このように問いました。「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたにその権威を授けたのですか。」彼らが言いたいのは、誰から許可を取ってこんなことをしているのかということです。宮を治めている我々はあなたにそんな許可を与えてはいない。ならばなぜ勝手にこんなことをするのか。もし万が一、「神からの権威によって」などと答えたらしめたものです。神への冒とく罪として訴えよう！と彼らは目論んでいたのでしょうか。それに対してイエス様はまずこのように答えられました。「わたしも一言尋ねましょう。それにあなたがたが答えるなら、わたしも、何の権威によってこれらのことをしているのか言いましょう。」イエス様はすぐに答えることをせずに、カウンターアクションを出されます。これは彼らの質問から逃げるためではありません。彼らの問いは悪意を持った問いです。それにそのまま答えることが良いとは限りません。

イエス様は問われました。「ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか、それとも人からですか。」これは祭司長たちにとって思わぬところへ追い込まれる問いでした。彼らがここで論じ合ったように、もし「天から」と言えば、「それならなぜヨハネを信じなかったのか」と言われることになります。そしてこれは単にヨハネだけの問題ではありません。ヨハネはイエス様こそ来たるべきメシヤだと宣べ伝

えていましたから、そのヨハネを天から遣わされた人と認めるなら、イエス様をもそのような方として認めなければならなくなります。それは避けたい。一方、「人から出た」と言えばどうなるでしょう。群衆はみなヨハネを預言者と思っていましたから、彼らがどんな反応をするか怖い。人々はヨハネを神からの預言者と信じ、彼らの多くがヨハネからバプテスマを受けていましたから、その彼らからどんな仕打ちをされるか分かりません。

このジレンマに陥って彼らは何と答えたでしょう。彼らはイエス様に「分かりません」と答えました。これは本当の意味で「分からない」ということではなくて、都合が悪いことは言いたくないという意味です。彼らは真理に心を閉ざしています。それを認めると自分たちの在り方、生き方を変えなければならなくなるので、それを拒絶しているのです。それで「分かりません」という言葉でとぼけようとしたのです。そんな彼らにイエス様は言われました。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」 厳しい答えです。祭司長や長老たちとしては、人々の前でイエス様を責め立て、追い払おうとしたのに、面目丸つぶれです。何かを言ってくれば、いくらでも揚げ足を取ろうと思っていたのに、想像したようなことをさせてくれない。思わぬ方向へ話が持って行かれた。見事な知恵です。これは決して問題のすり替えではありません。イエス様はきちんと答えています。バプテスマのヨハネを正しく見ることができれば、答えは明白です。何の権威によってこれらのことをしているか、はっきり分かります。群衆は分かっています。その示されていることに目をつぶる人たちに何かを語っても何の裏りがあるのでしょうか。イエス様はこうして示されている真理に心開かれているなら、十分にその答えが出せるような仕方で回答しておられたのです。

さてこのようにはっきり示されている神の啓示を受け入れない彼らに、イエス様はたとえ話を語って行かれます。ここから実はたとえ話が3つ連続します。今日の箇所では「二人の息子のたとえ」が語られ、次回見る33節以降、21章の終わりまでの部分では「悪い農夫たちのたとえ」が語られます。そして22章最初の部分では「結婚披露宴のたとえ」が語られます。いずれも同じ相手に対して、基本的に同じことを語っているたとえです。今日はその一つ目を見て行くことになります。

この「二人の息子のたとえ」。もしかすると多くの方は、あれ？と思うかもしれません。ここはこんな話だったろうかと。ここは新改訳2017になって大きく訳が変わっ

たところですが、第3版までは、たとえに出て来る兄と弟の態度が反対でした。第3版までは、兄は父の言葉を聞いて最初は「行きます」と言ったのに結局は行かなかった人として描かれています。一方、弟は「行きたくありません」と言ったけれども、後から悪かったと思って出かけて行きました。それが2017になってひっくり返っています。兄はここで「行きたくありません」と答えましたが、後になって思い直して出かけて行きます。一方の弟は最初は「行きます。お父さん」と言いながら、結局行きません。聖書では放蕩息子のたとえもそうですが、兄はどちらかという悪者として描かれる場合が多いと思います。カインとアベル、エサウとヤコブも然りです。しかしここでは兄が、最初こそ良くない反応をしたものの、最後には神に喜ばれる応答をしています。なぜ2017の訳はこのように変わったのでしょうか。それは採用した底本が違うからです。ご存知の通り、聖書の原本は存在しておらず、残された多くの写本から原本を復元しようとする地道な作業がずっと続けられています。そして最新の研究でより原本に近いと判断され、採用されたのは今回の方であるということです。少し専門的な話ですが、今から半世紀ほど前、これまでの新改訳で採用されて来たギリシャ語テキストはネストレ・アーラント第24版でしたが、今回の2017では最新版のネストレ・アーラント第28版が底本として採用されているとのことです。

それにしてもなぜこのように兄と応答の役割がひっくり返る写本が存在するのでしょうか。もし今回訳された2017年版が正しい方だとすれば、聖書を書き写す人々がコピーする過程で、これまでの第3版のような形に書き換えたということになります。間違っただけでそうした可能性もなくはありませんが、そうしたくなる理由がそこにあったということでしょう。考えられる一つのことは、もし兄が最初に行かないと言っても結局後から行ったなら、父が弟のところに行って同じように言うことはなかったのではないかという考えです。やはり兄は結局行かなかったから、父は次に弟に頼んだのではないのかと。しかし一人行けば十分とは限りません。兄がぶどう園に行っても、父がさらに弟のところに来て頼むとしても少しもおかしな話ではありません。それよりも大きな問題は、もし今回採用したテキストが正しいとするなら、31節と合わせて考えると、たとえの中の兄は取税人や遊女たちを指すことになるということです。そして弟が祭司長や長老たちを指すことになります。これは今一步しっくり来ない。それよりも民のリーダーである祭司長や長老たちが兄にあたる存在で、最初は行きますと言いながら結局は行かなかった。一方、弟にあたる取税人や遊女たちは、最初は従わない姿を示しつつも、後に悔い改めて従う者となったと理解する方がはるかにすんなり受け止められます。そういう

理解によって、ここをそのように書き換えた写本が生まれたと見るのが自然ではないでしょうか。しかし最新の研究では、それが本来の原文ではないという判断になっているわけです。結論的には今日の箇所はどちらでも根本メッセージは変わらないと思いますが、今回採用されたテキストは、これはこれで味があるのではないかとも思います。そのことは最後に短く触れたいと思います。

さてたとえの中の兄は、最初は「行きたくありません」と答えましたが、後になって思い直して出かけて行きました。一方の弟は「行きます。お父さん。」と約束しながら行きませんでした。どっちが父の願った通りにしたのでしょうか。答えは「兄」です。イエスは言われました。「まことに、あなたがたに言います。取税人たちや遊女たちが、あなたがたより先に神の国に入ります。」これは祭司長や長老たちにとってショッキングな言葉だったと思います。取税人や遊女と言ったら罪人の最たる者たちと考えられていた人たちです。神の国から最も遠い人々、決して神の国に入れぬ人々と彼らが考えていた人々です。その彼らが先に神の国に入るとイエスは言われた。それは彼らがたとえの中の兄にあたるからです。最初は神の御心に従わず、反対の生き方をしていましたが、後になって思い直して父の命令に従う者となったからです。32節に、彼らはヨハネとそのメッセージを信じたと記されています。ヨハネを受け入れ、ヨハネが示した義なる方イエス様を受け入れています。ここにもイエス様がバプテスマのヨハネを高く見ていることが示されています。時々ヨハネはイエス様と違う主張をした人であるかのように言われることがありますが、イエス様はヨハネをご自分と一致する人として見ています。その彼のメッセージを取税人たちは受け入れ、自分たちの生き方を思い直して、神の国に入る者となりました。それとは対照的に、ヨハネを受け入れず、ヨハネが示したイエス様をも受け入れぬ祭司長たちは、そのままでは神の国に入れぬ。31節の「あなたがたより先に神の国に入ります」という言葉は、入る順序のことが言われているだけで、彼らが神の国から締め出されているわけではない。その門は彼らにもなお開かれていることが暗示されているとコメントする注解者たちもいます。しかし頑なな態度を取り続けるなら、その可能性もなくなります。32節で祭司長たちは、ヨハネに聞かなかったばかりか、彼のメッセージを受け入れてその生活が変えられた人々を見ても思い直して信じることをしなかったと言われています。目を開けばはっきり見て取れる証拠がそこにあるのに、彼らはそれを見ても態度を変えない。そのような態度を頑なに決めているなら神の国には入れぬ。それはたとえの中の弟のように、「お父さん、行きます！」と表面的には良い子を演じながら、実際のところ、その招きに従わない不従順の子らに

自分たちが相当するということを示すものです。

さて私たちはどうでしょう。今日の箇所で勧められていること、それは「思い直して信じる」ことではないでしょうか。取税人や遊女たちは、確かにこれまで悪を行って来ました。人々に蔑まれるようなことをして来ました。しかし彼らは「思い直し」ました。そして神の国に入る者とされました。つまりその人の過去がどうであったかは問題ではないということです。今までどんな歩みをして来た人でも、思い直して神の招きに従うなら、その人は神の国に入る者とされる。どんな過去を持つ人でも、悔い改める者を神は喜んで迎えてくださる。コリント人への手紙第二 5 章 17 節：「ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」 キリストを信じるなら、古いものは過ぎ去るので、私たちは今までの自分がどうであったかにはこだわらなくて良いのです。大切なことは思い直し、悔い改めて、神が招いておられる新しい道に行くことです。その時にその人は先に神の国に入る者とされるのです。

ですから私たちは教会の外にいる人々に対して、そのような態度でいなければなりません。放蕩息子のたとえに示されていますように、またルカの福音書 15 章全体がそのことを示していますように、神は悔い改める者を喜んで迎え入れてくださいます。取税人や遊女もです。ですから私たちはどんな人をも蔑むことなく、神の国への門戸を広く開けるべきです。この神の思いを反映する教会でなくてはならないと思います。

そしてこの招きはここに出て来る祭司長や民の長老たちにもなお向けられていると見るべきではないでしょうか。この二人の息子のたとえにおいて祭司長たちは、先に見たように、弟の側にたとえられています。従います！と従順な振りをしながら、実際には従わない人々。しかしそのような意味で神に従っていない彼らは、その点でたとえの中の兄が示した最初の姿にも重なって来るのではないのでしょうか。おそらく当時の彼らは、自分たちが兄か弟にたとえられるなら、自分たちは兄に相当すると思っていたと思います。自分たちが弟で取税人や遊女たちが兄であるとはあまりにおかしなたとえであると。自然なのはやはり我々に兄が当てはめられることであると。そしてそうだとしたら、まさに彼らはたとえの兄のように神に従っていません。そういう彼らに、このたとえは次のようなメッセージを持つものでもあったのではないのでしょうか。あなたがたは自分を兄だと思ふなら、まさにこのたとえの中の兄のようであれ！と。これまで行きた

くありませんという態度を取っていても、思い直して父の命令に従って出かけて行った兄のようであるように！自分のこれまでの生き方をもう一度振り返って、正しい道へと踏み出して行く、祝福された兄のようであるように！と。

私たちはどっちに似ているでしょうか。神の言葉に接して、「従います！」という素ぶりを見せつつ、結局は従わない者でしょうか。それでは真の祝福はありません。いかに表面的に、その場を繕った立派な受け答えをしてもです。大切な道、祝福の道は思い直して信じる道です。イエス様は私たち一人一人をそこへ招いてくださっています。そのイエス様の言葉によく聞いて、素直な心を与えていただいて、たとえこれまで「嫌です。行きたくありません。」と答えていたとしても、よく考えて「思い直す」歩みへ、思い直して信じる歩みへ、そして神の国に「先に入る者」とされる幸いに歩む者へ導かれて行きたいと思います。